熊本保健科学大学
週刊 NEWSLETTER
2023.9.1
第 207号
発行 入試・広報課

好奇心持って一歩踏み出せ

理事長室から

木下 統晴

８月26日（土）、国立感染症研究所病原体ゲノム解析センター長、黒田誠先生による大学院修士課程の90分の講義に参加しました。今年４月に国立感染症研究所と本学が結んだ連携大学院の記念すべき第１回の講義です。PCRの基本・応用・実践をテーマにした講義の詳細は、志多田研究員の報告に任せるとして、私は、自分が初めてPCRの威力を経験した頃のお話をします。

1997年頃、私は、岐阜の製薬工場の品質管理部長を務めていました。製薬用の水を0.2μｍのフィルターを用いてろ過するのですが、通常は、このポアサイズであれば除菌できるはずです。ところが、どうしても菌（バイオフィルム）が出てきて困っていました。改善が進みません。その時、解決につながったのがPCRだったのです。PCRで同定した結果、菌はラルストニア・ピケッティ（Ralstonia pickettii）でした。この菌が、0.2μｍの膜を通過していたのです。他の細菌は、その膜を通過できません。そのフィルターろ過後の水から検出される菌は、ラルストニア・ピケッティばかりです。なるほど、ろ過の理屈が通ると思いました。この菌は貧栄養のきれいな水のところで生きていける菌でした。PCRの同定で、工場で苦労した難問をすぐに解決することができました。「PCRは凄い」と感じたのは、25年程前のことです。この３年は、新型コロナでPCRは認知されてしまいました。

黒田先生の今回の講義はPCRでしたが、これから次世代シークエンサーなど遺伝子解析へと展開していくと思います。先生の講義が楽しみです。

そして、受講して思ったことは、好奇心をもつことの大事さです。ちょっとした一歩を踏み出せば、色々なものが見えます。また、素晴らしい方と出会えます。

教育、研究、社会人のリカレント教育、リスキリング教育、高大連携、小学生・中学生、父兄、老若男女を問わず、身体と心の健康へのチャレンジなど、大学は、最高の場所だと改めて思いました。黒田先生に心から感謝申し上げます。＝**写真は、講義後に記念撮影する関係者。右から３人目が黒田先生**

日本臨床細胞学会総会春期総会　ポスター部門

亀山講師（医学検査学科）に優秀演題賞

６月９（金）～11日（日）に名古屋国際会議場で開催された第64回日本臨床細胞学会総会（春期大会）で、医学検査学科の亀山広喜講師＝**写真**＝がポスター部門の優秀演題賞を受賞しました。

受賞演題は「ヒト肺小細胞癌を用いたスフェロイド培養（３次元培養）の基礎的検討」。ヒト肺小細胞癌を生体内の増殖環境に近づけることで、より癌の特性を明らかにできるとの考えのもとに取り組んだ基礎研究の一環で、伊藤隆明教授、南部雅美教授との共同研究です。

一般的な細胞培養では、２次元培養が主流となっていますが、生体内では細胞は３次元で増殖しています。そのため生体内の細胞の特性に近い環境での培養が可能となるスフェロイド培養が行われるようになりました。亀山講師は、ヒト肺小細胞癌であるH69AR細胞を用いて２次元培養とスフェロイド培養（３次元培養）の形態学的及び遺伝子発現の基礎的検討を行いました。

亀山講師は「今後は次世代シークエンサーを用いて、広範な遺伝子発現比較解析が可能であるRNAシーケンス実験に取り組み、同学会総会の秋期大会で発表する予定です」と話していました。（入試・広報課）

来て、見て、触れて…熱心に高校生

血圧測定に悪戦苦闘

一日看護学生体験

「高校生の一日看護学生体験」が８月22日（火）、3320実習室で行われ、県内の高校生19人が参加しました。コロナ禍のため昨年までは規模を縮小して実施していましたが、今年はコロナ禍前と同様の体制による開催となりました。

同日は、岡順子教授が「看護とは何か？」と題して看護の定義や目的、基礎技術の「バイタルサイン（生命兆候）：血圧、脈拍など」について模擬授業を行い、生徒たちは緊張した面持ちで受講していました。演習では、実際に聴診器を使っての血圧測定や、パルスオキシメーターを使った血中酸素飽和度や脈拍の測定を体験しました。聴診器を使っての血圧測定は初めての生徒が多く、悪戦苦闘する姿も見られました。

生徒たちは「演習が思ったより緊張したけど、うまくいってよかった」、「（学内見学では）ベッドなど設備が整っていて、改めて驚いた」、「（今日の体験を受けて）もっと看護について学びたいと思った」などの感想を述べていました。また、体験講義・演習が終わっても居残って、再度血圧測定に取り組む熱心な生徒たちもいました。

（入試・広報課）

高校生に血圧測定を実演する荒木善光講師（左）

クイズについて話し合う熊本西高生たち

言語聴覚士って？

高大連携、SGと交流

熊本西高の生徒９人が８月21日（月）、松原慶吾准教授（言語聴覚学専攻）のスモールグループ（SG）を訪問し、言語聴覚士について学びました。同校との高大連携の一環で、昨年度と同じように同校と松原SGとの間で計３回計画されています。

本年度第１回となる同日は、「言語聴覚士について知ろう！」をテーマに3219実習室で松原SGの横林尚太さん、久木井萌さん、小嶋陽菜さん、益田桃佳さん、白浜あやかさん（以上、言語聴覚学専攻４年）が言語聴覚士の仕事について説明しました。合間にはクイズも出題され、終始穏やかな雰囲気の中で行われました。

中学２年生の時、言語聴覚士と接した経験がきっかけで言語聴覚士を志すようになったという宮川姫乃さん（同校２年）は今回の講座を「（いろいろ学べて）楽しかったです」と振り返り、「残り２回の講座も楽しみです」と期待を口にしていました。

第２回は「高齢者の現状と言語聴覚士の対応」のテーマで28日（月）に同校で実施されました。第３回も「評価に基づいた訓練と言語聴覚士体験」と題して同校で講話と演習を行います。（入試・広報課）

■必由館高校１年生が来学　必由館高校の１年生48人が８月24日（木）に来学し、模擬授業等を体験しました。一行は、大学概要についての説明を受けた後、健康・スポーツ教育研究センタースタッフの案内でアリーナを見学。その後、希望の学科ごとに分かれ、模擬授業を受講しました。在学生の発表コーナーでは、同校の卒業生でもある玉永朱里紗さん（医学検査学科３年）、宇都宮早紀さん（看護学科３年）、岡嶋真由さん（リハビリテーション学科言語聴覚学専攻３年）が、大学生活について所属する学科専攻の４年間の流れや志望動機について話をしました。質問コーナーでは、高校生たちから苦手教科の克服方法や受験直前の学習時間、おすすめのアルバイトなどの質問があり、卒業生の３人は丁寧に答えていました。（入試・広報課）

先輩学生による学科説明などを聞く必由館高校の生徒たち

トップアスリート　「食」で支える

管理栄養士・村野さん　地道な継続の大切さ訴え

健康・スポーツ教育研究センターが水上村との包括連携協定に基づいて７月と８月に実施した「スポーツ合宿アスリート支援」。支援プログラムの中で「栄養指導」にあたった（株）明治の管理栄養士、村野あずささん＝**写真**＝は、プロボクシングWBC・WBOスーパーバンタム級王者の井上尚弥選手、女子マラソンの新谷仁美選手、平昌、北京両五輪で金メダルを獲得したスピードスケートの髙木美帆選手らトップアスリートの栄養アドバイザーとして、高いパフォーマンスを支えています。

村野さんによると、競技は違ってもトップ選手たちに共通するのは「自分に限界をつくらず、常に高みを目指していること」です。そのためには、「基本を大切にし、地道なことを継続する力」を備えているといいます。

「地道な継続」は食事の面でも同様です。どの選手も食に対する意識は高く、例えば髙木選手は「食事ひとつで大きく変わることはないけれど、この積み重ねの先の未来で大きく変われると思うと、ひとつたりともおろそかにできない」と、北京五輪までの１年間、食事ごとにその内容を写した写真が、村野さんの携帯に送られてきていたといいます。

水上村でのアスリート支援では、「栄養フルコース型」の考え方をベースに本学と明治が共同で考案した「スポーツ飯」が、選手が宿泊する民宿で提供されています。食事内容を写真に撮って親にメール送信する選手もおり、村野さんは「合宿を機に、ふだんの食を大切にするという意識が広がってほしい」と話していました。（NL編集部）

インフォメーション

週間行事予定（９月２日～８日）	
９ / ３（日）	９月期オープンキャンパス
９ / ７（木）８：50～	大学院修士学院論文　中間発表会（1304M講義室）

リハ学科３専攻を特番で紹介　９日10時35分～、テレビ熊本

本学のリハビリテーション学科３専攻の取り組みを９日（土）10時35分から、テレビ熊本（TKU）の特別番組で紹介します。「リハビリテーションの新たな未来をひらく」と題した約30分の放送では、各専攻の学生や専攻長のインタビューや朝日野総合病院で活躍する卒業生の様子などが紹介されます。TKUは本学や朝日野総合病院での取材を重ねてきました。ぜひご視聴ください。